札幌市立南郷小学校　　学校だより 第６号
令和８年 ８月３１日

南郷

【学校電話】011-861-9305

【学校ホームページ】
https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/

子どもへのかかわり方をアップデートする
～ある父親の姿と、当時の自分を振り返って～

校長　関根治彦

前号で旅行の話を書きました。この夏休み、息子３人の中で唯一同居している三男に「○○に泊まりに行こうと思うけど、日程大丈夫？」と聞くと、「日程は大丈夫だけど、俺はいいや。お父さんとお母さんで行ってきて」と振られてしまいました…。結局は夫婦で行くことになりました。ホテルに着き、大浴場に行くと、大浴場の中で、小学生～園児ぐらいの３人の子どもたちが走り回って遊んでいました。そして湯船に飛び込み、お湯を掛け合って遊んでいます。当然周りの大人たちは、迷惑そうな視線を向けています。私は子どもたち３人の所に行って「お風呂で走り回ると滑って転ぶから危ないよ。それに、ここはプールではないので、飛び込んだり、水を掛け合ったりしてはいけないよ。」と注意しました。すると父親らしき人が私の所にやってきて、「すいません。旅行に来ていて、気持ちが高ぶってしまっているので、大目に見ていただけませんか？」と謝罪してきました。私は「走り回り、怪我をしてしまうと楽しい旅行が台無しになりませんか？何よりも、お子さんたちは、いつ、公共の施設では他の人たちに迷惑を掛けないようにしなければならないということを学ぶのでしょうか？」と尋ねました。父親らしきには「そうですね。」と納得したように言って、子どもたちに、話を始めました。その後、湯船につかっていると、子どもたちがやってきて、「ごめんなさい。」と謝罪してきました。私は「いいんだよ。気を付けてね。」と笑うと、子どもたちはニコッと笑って、お風呂を出て行きました。その後父親らしき人が来て、私に「ありがとうございました。」と言うと、次にやや大きめの声で「子どもたちが御迷惑をお掛けしました。すいません。」と大浴場にいる人たちに向かって頭を下げていきました。私はその父親らしき人の行動にいたく感動をして、部屋に戻ると妻に一連の話をしました。妻からはあきれられましたが…。

話は変わりますが、一昨年、実家を処分する際、実家の棚に学校の教員になってから、スクラップしていた自分のファイルを見付けました。そして、この夏休みには、自宅の断捨離を実施。その際、そのファイルを見直しているときに、古い新聞記事の切り抜きを見付けました。

> 子どもに対する親に必要な基本的態度に四つある。これは将来的にもう心配はないという多くの青年たちに、子ども時代を振り返って調査して分かってきた共通事項である。
>
> その第一は、親は「厳しかったが、それ以上に温かかった」ということ。子どもの成長に欠かせない安心・安全の欲求が満たされていた上に、殺さない、盗まない、いじめないなどのしつけの三要素が徹底していたという親の姿勢であった。
>
> 第二は「叱られていたけど、励まされることが多かった。」子どもは、叱られながら人になるのは当然であるが、その上に、いつも将来に対する希望や夢があったということだろう。
>
> 第三は、母親が「口うるさくよく言い聞かされたが、よく聞き役になってくれた」。特に母親が口うるさくないと子どもはまともに育たないが、それは一方通行で、子どもに話しに耳を傾けて、大笑いをしながら楽しむ母親であれば、子どもは高校生や大学生になっても、学校や友人のことなどを何でも話をするものである。
>
> 第四は「必要なものは最低限与えられたが、多くは耐えさせられた」ということである。これは、いまの世間では一番難しいことなのかもしれない。親の文化程度が問われる問題でもある。
>
> 作家の吉川英治氏は、裕福な青年にこう語っている。
>
> 「君は不幸だ。早くから、おいしいものを食べすぎ、美しいものを見すぎているということは、こんな不幸はない。喜びを喜びとして感じる感受性が薄れていくということは、青年として気の毒なことだ」と。
>
> 「人はいつも豊かなら惰弱になり、いつも喝采なら愚鈍になる」という人もいた。
>
> ～北海道新聞　「妄言有情　子育て四条件」　松尾つよし著　より引用（原文のまま）～

内容的には時代を反映していますが、大切なのは「子どもを育てている」という意識をもって子どもに関わることではないかと思います。この文章を書きながら、私はこのスクラップしていたコラムを読んだときに、温泉の父親のように子どもに対する関わり方を変えることができただろうかと、反省しきりでした。

９月に入ります。一年間の折り返しに近付いてきております。保護者、地域の皆様には、共に子どもを育てる者として、共に成長していければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。